

スイッディー：インドの アフリカ系「部族」について

村山和之 特別研究員・和光大学非常勤講師

はじめに

南アジア世界にアフリカ大陸から黒人 *negroid* が移住し、現在もなお幾つかの「アフリカの」としか表現のしようがない独自性（非インド性）を生活文化の中に維持していることは、注目に値する事実である。特に、彼らが集団で演ずるゴマ *goma* と呼ばれる舞踏パフォーマンスにおける身体表現、音楽、そして伴奏楽器の数々は、数あるインドの「部族」ダンスの中でも明らかにアフリカの特徴が顕著であるといえる。その集団名を一般的に「スイーディー *Sidī*」、インド西部のグジャラート地方では「スイッディー *Siddī*」⁽¹⁾と呼ぶ。これは自称にもなっている。以降、呼称はこの区別に従うこととする。

1996年から始まった和光大学によるパキスタン・バローチスターン州調査においても、アラビア海沿岸のマクラーン地方を中心に、黒人集団のパフォーマンスを調査した。パキスタンにおいては、スイーディーが行う舞踏パフォーマンスに使用される打楽器に注目した。

詳しくは既刊の報告⁽²⁾にゆずるが、次の2点が明らかになった。まず、地方によって呼称が異なる大小からなる両面太鼓の組み合わせを基本構成としていること。そして、脚台がついた縦に細長いムガルマーン *mugarmān* と呼ばれるアフリカのドラムが使用される演目もあることである。特に、ムガルマーンは、同一パフォーマンス内で使用される他の太鼓類と比較して聖性が格段高く、機能も異なっている。

これらの楽器類が、南アジアで創り出されたものではなく、その起源を東

(1) 萬宮健策 2000 「シーディー」『世界民族事典』pp.298c-299a. 引文堂

(2) 村山和之 1998 「傀儡師たちの道：バローチスターン南西部の音楽」『東西南北 1998』和光大学総合文化研究所年報、pp.138-43. <http://www.wako.ac.jp/souken/touzai98/tz9817c.htm>
2000 「1999年度 バローチスターン調査報告」『東西南北2000』和光大学総合文化研究所年報、pp.84-97. <http://www.wako.ac.jp/souken/touzai00/tz2008.html>

アフリカに持ち、海洋貿易またはアフリカ人の移住によって伝播されたものと仮定してみよう。また、その伝播時期とルートをこの500年間の海上世界に限定してみよう。その世界において、何らかの形で当該楽器の伝播に関与するのは、インド洋とアラビア海の覇権を競い合ったペルシア人、ポルトガル人、オマーンアラブ人、イギリス人、そしてもちろんインド人たちであった。より現実的には、マスカットとザンジバルの2都をつなぐ海上ルートを治めたオマーン王国がイギリスによって傀儡化され、奴隷貿易が終息する19世紀半ばまでに、伝播がなされたとまず考えてみたい。

なぜなら、ムガルマーン型の太鼓が見られるオマーンをはじめとするペルシア湾岸地域、パキスタンのマクラーン地方そしてインド西部グジャラート地方は、オマーンとインドのダウ船が相互に鎬を削った重要な市場に一致するからである。それらの地域には現在も黒人集団が存在し、彼らの音楽、舞踏のみに関わらず言語⁽³⁾や民間医療⁽⁴⁾の領域にもアフリカ起源と考えられる文化が見られる。共時的視野で、当該地域におけるこれらの文化現象を把握するためには、より具体的なフィールドワークの実施が求められよう。中近東世界、東アフリカ世界と南西アジア世界とを海洋交渉を媒体とした、1つの文化水域として人の移動を念頭において考証し直さなくてはなるまい。

以上の経緯から2004年3月初旬、有志の学生諸子⁽⁵⁾と共にインド・グジャラート州における黒人集団スィディーの集落、聖祠を訪問した。目的はインドにおいてムガルマーン型太鼓の存在を確認し、あわよくばパフォーマンスを記録することであった。我々の旅は、東部の仏教美術を対象とした前半調査がデリー調査をもって終了した後、本行程では初めてのブッキングなしの自由旅行的移動調査体験を強いるものとなった。そこでは、緊張感が緩んだり、疲労が積み重なったりして、みなそれぞれ体調を崩した局面にも遭遇した。けれども、各自が補いあい、結果的に予想以上の貴重な情報を集め、記録に残すことができたと自負している。

年度がかわって2004年度には、この調査の成果を踏まえた小報告を和光大学内外で行った⁽⁶⁾。報告会では、南アジア研究者のみならず、アフリカ音楽や

(3) 「スィディー語」と訳される彼らの隠語 *Sidī Bhāshā*、舞踏パフォーマンス時の歌詞に現われる意味不明の言語。彼らはスワヒリ語であると自認している。

(4) イランをはじめとするペルシア湾岸で見られるヒーリング儀礼「ザール *zār*」、パキスタン・マクラーン地方における同種の儀礼「グワーティー *gwāṭī*」など。拙稿「グワーティーの実像をもとめて」『和光大学表現学部紀要』第5号（2004）を参照。

(5) 東聖子（Azuma Masako 本学大学院生）および萩野亮（Hagino Ryo 本学イメージ文化学科1年生）

アフリカンダンスの専門家⁽⁷⁾からも率直なコメントをいただくこともできた。

本節は、インドにおけるスィーディー、いやこの場合「スィッディー」を対象とした第1回訪問調査の「フィールドノート」である。首都ニューデリーから始まり、グジャラート州においてはラタンプル Ratanpur とジャームブル Jāmbur というスィッディーたちが集住する村落を2箇所ほど訪問した。構成は、スィーディーについての基本情報を提示し、順に各地における調査成果を紹介する形で整理してみたい。なお楽器と舞踏パフォーマンス調査に重点を置いたため、それらの新情報が得られなかったジャームブルに関する報告は次の機会を待つとしたい。



(6) 村山和之 2004年「インドのアフリカ人について」「インドの美術と信仰」東西交渉史研究会
インド調査報告 和光大学、5月22日「南アジアの黒人ムスリム集団について」(南アジア研究集
会、八王子大学セミナーハウス、7月17日)

(7) 翁長巳酉氏(パーカッション奏者/ブラジル音楽、モザンビーク音楽研究家)
渡辺朋子氏(本学イメージ文化学科4年/ガーナにてアフリカンダンス専攻)

1. スィーディー概論

1.1 南アジアのアフリカ人

インド西部からパキスタン南西部にかけてみられるアフリカ系黒人集団を総称して「スィーディー (Sidīs)」とよぶ。その名称の由来は「ムハンマドの血筋、高貴な血筋をもつ人」を意味するサイアディー (saiadī) が変化したものである。パキスタンではシーディー、インド・グジャラート州ではスィッディーとも呼ばれる。アビシニア (エチオピア) 出身者という意味から、「ハブシー *Habshi*」とも呼ばれている。人口は約5万人である。

彼らの亜大陸世界への流入は、イスラームの到来とともに始まった。初期のこの時代、スィーディーの遠い祖先たちは、イスラームの遠征軍と共に貿易商人、托鉢求道者、船乗り、職人、奴隷そして兵士として南アジアへ渡ってきた。時代は下って、大航海時代のポルトガル船は彼らを奴隷として陸揚げしたし、インド人たちは奉公人、召使いに彼らを重用していた [Patel: 2004, p.213]。イギリスによって19世紀半ばに奴隷制が廃止⁽⁸⁾されることで、アフリカ人の大量流入の時代は閉幕する。

歴史的に見れば、インドで軍人や高官として活躍したスィーディーたちも少なくはない。13世紀からグジャラートやデカン高原に登場する、宮廷執事や奴隷軍人といわれるエリートたちである。彼らは、身体能力に優れ、忠誠心が強く、実務に長けていたためイスラーム教徒の施政者たちに愛でられた。軍事的手腕の上に、政治的にも才能を発揮してスィーディー勢力をまとめあげ、独立藩王国の政権の座に着いたマリック・アンバル *Malik Ambar* は、頂点にのぼりつめた一人であろう。また、西インド沿岸部、具体的にはディーウからゴア周辺にかけてのポルトガル勢力圏では、ポルトガルによってもたらされたハブシーたちが、その武勇をいかんなく発揮していた。ポルトガルが築いた要塞の防衛に当たっていた彼らは、在地インド人 (マラータ族など) と戦い、機会を見て反旗を翻しポルトガル船を追い出す。幾多の攻防が繰り広げられた。その結果、ムンバイ南方60キロの地にある要塞島ジャンジール *Janjiira* は、彼らが勝ち取った自治の象徴となった。インド史のなかに彼らの記述を求める作業はこれ以上進める時間と紙面がない。

(8) 1807年 英国「奴隷貿易禁止法」成立、1833年 英国「奴隷制禁止法」成立、1873年 ザンジバル奴隷市場の閉鎖 (奴隷貿易の禁止) 1888年 帝国イギリス東アフリカ会社による東アフリカ領の統治開始 [富永: 2001, viii-ix]



図1 カマルッディーン導師

1.2 宗教と聖者信仰

スィーディーたちの信仰する宗教は何であろうか。在住する地域の歴史的背景、具体的には施政者の宗教に一致することが一般的である。つまり、ムスリム政権の下ではイスラーム教徒、ヨーロッパ勢力の影響が強い土地ではキリスト教徒となる例である。ヒンドゥー教徒との通婚からヒンドゥー教徒となっている者もいる。

本節では、調査対象地がイスラーム多数地域であるため、イスラーム教の場合に限って言及する。スィー

ディーのムスリムには、スンニー派信者もシーア派信者も存在する。また、自らスンニー派でありながら、シーア派の服喪行事アーシュラーを行うスィーディー⁽⁹⁾たちもいる。同時に、神秘主義教団の導師を崇拝する者もいる。ラタンプルのスィーディーたちは、ヴァローダラーの聖者ピール・サイヤド・カマルッディーン *Pir Sayed Kamaluddin* を導師⁽¹⁰⁾として崇敬している（図1）。彼はリファーイー教団 *Al Rifā'iya* に属する。

聖者崇拝がイスラームの信仰と一体化している現象が顕著である。その中でも、黒人ムスリムの榮譽であり聖者として称えられるハズラット・ビラールと、スィーディーたちの守護聖者であるパーワー・ゴールに対する熱狂的な信仰は、特徴的であろう。

1.2-1 ハズラット・ビラール信仰

ハズラット・ビラール *Hazrat Bilal* は、自ら黒人でしかも奴隷であった。預言者ムハンマドのイスラーム布教の最初期に改宗した。ムハンマドの妻ハディース、叔父のアブー・バクルに次いで3番目にアッラーに帰依したが、黒人ムスリムにとっては誇らしい名誉である。彼は、後にアブー・バクルによって解放奴隷となる。そして、ムハンマドによってもう1つ名誉ある

(9) 今回訪問したラタンプルとジャームブルのスィーディーたちがまさにそうであった。フセインの墓廟を模った山車ターズィア *tāziya* が、彼らの守護聖者廟にみられた。

(10) 聞き取りでは、導師を「ムルシド *murshid*」ではなく「グル *guru*」と呼んでいた。

任務を与えられるのだ。礼拝の呼びかけであるアザーン *azān* を行う「ムアッズイン *muazzin*」の任を、その声を見込まれて最初につとめたのがピラールであった。この史実によって、黒人ムスリムたちは歌に長けた自分たちの特性を、精神的にピラールの遺伝子につながる点に起因すると信じるところがある。パキスタン、カラーチーのシーディー共同体では、毎年、ハズラット・ピラールの命日祭（ウルス）が営まれている。

1.2-2 パーワー・ゴール信仰

パーワー・ゴール *Bāwā Gor* は、ゴーリー・ピール *Gorī Pīr* とも呼ばれる。パーワーは「父」や「聖者」を表し、ゴールの意味はアラビア語起源のウルドゥー語のガウル '*gaur*「深遠なる思考」である。「思慮深き聖者様」とでも訳そうか。

伝承によれば、アフリカからメッカに来た彼は、軍の司令官として預言者ムハンマドに派遣されてこの地に到来したという。現在、グジャラート州バルチ県ジャガディーヤのラタンブル村に位置するパーワー・ゴール廟が建っている丘の上には、かつて「バター女神」を意味するマッカン・デーヴィー *Makkhan Devī* が住んでおり、彼女を祭る寺院があった。悪神であった女神は、人間を殺して喰らい、その血を額に塗って吉祥印（ティラク *tilak*）を描くことを日々の習いとしていた。そして寺院のランプには、その名に恥じぬ50ポンドもの大量のバターが常に供えられ、その灯火は眩しく消えることがなかった。

この不審な光と悪行は、メッカにおわすムハンマドをも不安にさせた。そのランプの火を消して、イスラームの新たな光を点すため、シャイフ・ゴーリー・シーディー *Shaikh Gorī Sīdī*⁽¹¹⁾をその光源に遣わした。シーディーたちで軍団を組織した彼は、大任を負って出発する。途中バグダードで、彼はリファーイー教団の始祖アフメド・カビール・リファーイー *Ahmed Kabīr Rifāī* の弟子となった。そこで、師自身から教義の伝道資格とパーワー・ゴールという名前を授かり、インドへと軍勢を進めた。彼が寺院に到達すると、マッカン・デーヴィーは自ら地中深く逃亡してしまった。彼は女神の寺院を自分の住居として、イスラームを説くこととした。[Kenoyer & Bhan 2004: 48-49][Abbas 2002: 41-42]

また、ラタンブル村の伝統的地場産業として現在でも採掘が続けられてい

(11) [Abbas 2002] では、Sidi Mubarak Nobi となっている。



図2 ラタンブル産の瑪瑙

る瑪瑙⁽¹²⁾ (図2) の鉱脈を発見し、その技術や商業化を伝えたのもゴーリー・ピールであるという伝承も残る。彼はイエメンをも内含するエチオピアからメッカに来た。それ以降、マクランやスインドを経由してラタンブルから40キロ離れたラージピープラーの町に

達するまでの数年間、托鉢求道者として数珠・貴石の商人として放浪生活を続けた。彼は12人の兄弟と共に、この旅の途中に11箇所逗留した。現在もスィーディー共同体が逗留地には残っている⁽¹³⁾ [Kenoyer & Bhan 2004: 48-49] パキスタンのスィーディーを調査した Abbas [2002] によれば、スインドにおいてもパーワー・ゴールは「マーマー・ゴール *Māmā Gor*」の名で崇敬されているという。このように、パーワー・ゴールはスィッディーたちの伝説の先祖であると同時に、宗教的指導者にして生業の指導者という複合的機能を有する守護聖者であるといえよう。

1.2-3 スィーディーの系譜伝承

また、Saleem [1988] は、パキスタンでは自らの祖先をピラールに求めるスィーディー共同体をピラーリー・スィーディー、カンバル *Hazrat Qanbar* に求める共同体をカンブラーニー・スィーディーとする分類があることを報告している。

カンブラーニーの起源伝承によれば、第4代目カリフ・アリーにはカンバルとアンバルという黒人奴隷がいた。ある日、2人を伴って狩りに出かけたアリーは見事な鹿を見つける。追い詰めていった後、アンバルは鹿の首に、カンバルは腰に飛びつき見事生け捕りに成功する。その時、2人の働きを喜んだアリーは思わず勢いで「アンバルは子孫に恵まれるが、カンバルは子孫を残せない」と口にしてしまった。傷ついたカンバルが「その呪いの言葉に

(12) 現地では「アキーク *aqiq*」と呼ばれている。

(13) ゴーリー・ピールが逗留したといわれるカラーチーの聖者廟マンゴー・ピール *Mangho Pir* の命日祭には、スィーディーたちが構成される参詣団が参道を踊りながら行列する場面を実見した。また、グジャラート州カッチ県ブジ市ではパーワー・ゴールのバイタク *Baithak* つまり御座所が存在し聖所となっていた。

よって私の名前は後世に残らぬのですね」と抗議する。するとアリーはこう言い放った、「それは呪いとはならぬ。案ずるな。アンバルの子孫たちがカンブラーニーを名乗ってお前の名を末代まで広めていくから」と [Saleem 1988: 4]

カンブラーニー・スィーディーに関して、Burton [1851: 255]⁽¹⁴⁾は「四分の一黒人 the quaeroon」と記録している。グジャラートの調査地ラタンブルでは、ピラーリーの名が確認できたことから、この分類はインドにおいても適合する場合があるといえる。ただ、カンブラーニーの存在に関しては、現時点では調査不足のため断言はできない。

スィーディーの社会的位置は、奴隷制がなくなった現在でも高いとはいえない。また、奉仕するクラスの集団に対してその社会的関係性は継続している。全体的に貧しく、肉体労働が生活の核になっている。Campbell [1899: 12] が記したように、グジャラートのムスリムとしては、唯一音楽や舞踊を提供する集団であったようだ。藩王国時代、王宮に招聘されて賓客の面前で芸能を披露したり、村落でも祝祭日や結婚式に呼ばれていた。そして余興の報酬を食物や衣類で受け取っていたのだ。現在のインドにおいては、指定部族 Scheduled Tribes (ST)、指定カースト Scheduled Castes (SC)、或いは非 ST・SC に指定される。スィーディーの内部からは「スィーディー民族 Siddiance Zat」として連帯をめざす運動がはじまるが、まだ連帯を見ない段階のようである [Camara 2004: 113]

パキスタンにおいては、南部のカラーチー、スィンド地方やパローチスターン地方に集住する。法制的には、パキスタン人一部族民 tribal として特別扱いは無い。個人的に最も多く実見したパローチスターン南部では、ヒズマトカール（奉仕階層）の最下層にグラーム（下僕）とともにスィーディーが位置づけられていた。

2. ニューデリーのスィーディー調査

2.1 サンギート・ナータク・アカデミー

インド共和国の首都ニューデリーには国立音楽舞踊演劇アカデミー Sangheet Natak Akademi がある。コンノートサークルから南東にのびるバラカ

(14) [Burton 1851: 254] にはスィンドにおけるスィーディーの主要なグループ目録が掲載されている。Dengereko, Dondere, Gindo, Kamang, Makonde, Makua, Matumbi, Mkami, Msagar, Mudoe, Mukodongo, Murima, Murima-phani, Muwhere, Myas, Myasenda, Mzigra, Nizizimiza, Nyamuezi, Temaluye, Zalama, Zinzigari.



図3 ムガルバーン

ンバ通りが日本情報センターも面するフェローズ・シャー通りと交わるラウンドアバウトの一角に、美術アカデミー、文学アカデミーと同じ玄関を共有している。

3月3日。今回のグジャラート州におけるスィーディーの楽器とパフォーマンスの資料収集の第一歩として、長年お世話になっているこのアカデミーにまず挨拶に行く。1階の楽器博物館の展示品に大きな変化があった。何と、まさにこれから見に行こうとしていたスィーディー特有の太鼓ムガルマーンがコレクションに加えられている。名称はムガルバーン *mugarbān* となっていたが間違いはない。ドラム缶で作られ

ているが高さが1メートルほどあり、存在感をアピールしている。紅い布と孔雀の羽でボディを隠している(図3)。残念だが撮影は禁止されているので、職員に訴えると得意気にある図冊⁽¹⁵⁾を出してきた。2002年の3月末に敷地内にあるギャラリーを会場に、所蔵楽器をメインにした大きな展示会が開かれた。この図冊はその時に作った収蔵楽器のカタログである。26ページを開くと展示されているムガルバーンの写真が掲載されていた。

既知の研究員の方々も定年退職や昇進などで、フロアと机の位置が変わっている。記録部のオフィサーとしてお世話になったバンサル氏は、退職しながらも進行中のアーカイブ・デジタル化作業の相談役として事務所にいらした。ほぼ10年ぶりの再会となるが覚えていてくださった。何も知らぬまま「ダマード・マスト・カラダルの歌」⁽¹⁶⁾、「大正琴(バエンジョー)」⁽¹⁷⁾の資料収集に駆け込んだ時、大変お世話になった方の1人である。

(15) Sangeet Natak Akademi, New Delhi 2002 *Vadya-Darshan*.

(16) 村山和之 1992 「赤い隼の歌をめぐる - 1」『象徴図像研究』Vol.VI, pp.49-59. 和光大学象徴図像研究会 1998 「フワージャ、ラール、カラダル：インダス渓谷地方のシンクレティズム考」『和光大学人文学部紀要』32号(1997) pp.121-38.

(17) 村山和之 1995 「南・西アジア大正琴事情」『インド音楽研究』5号 pp.4-34. インド音楽研究会 2002 「A Short Essay on the Study of Benjo in South Asia: A Musical Instrument Preserving a Japanese Blood.」『表現学部紀要』2号(2001) pp.169-178 和光大学

今回の訪問目的を告げると、もう退職しているにもかかわらず、若いオフィサー、ジョセフ氏⁽¹⁸⁾に紹介してくれた。そこで、「グジャラートのスィーディーの録画があるはずだから見せてやってくれ」と頼んでくれたのだ。翌日の10時半に約束してその日は辞去する。

2.2 - ビデオ所見 - 2004年3月04日のメモ

名刺屋の作業が手間取って、約束の10時半を15分も過ぎてサンギート・ナータク・アカデミーに到着する。3rd フロアで記帳していると、待っていてくれたのか、ジョセフが出迎えてくれ、そのまま登ってきた階段を2階も下り、ビデオが見られる部屋につれてきてくれた。管理責任者の婦人が、引き出しから件のビデオテープを取り出してセッティングしてくれる。「あとはご自由に」と2人ともいなくなった。

ジョセフが頭出しをしておいたのに、婦人は丁寧にも巻き戻してしまい、目的のパフォーマンスを探すのに時間がかかった。5番目の演目にスィーディーのダンスを見つめることができた。このテープは、「Video No.762 / 23.10.89 6th Lok Utsav '89⁽¹⁹⁾」⁽¹⁹⁾、15年前の記録である。

ステージ開始前の紹介では、「スィーディーはアフリカから来た人たちで、インドでは西部のグジャラート地方に多く住んでいる。もう300年以上インドに住んでいるけれども、伝統的な彼等固有の楽器と舞踊を現在も残し伝えている。全体としては短い曲が多い」とヒンディー語で語られた。

ステージ。中央にムガルバーン（*Mugarbān* であろう）その左右にドール系の両面太鼓奏者1人ずつ。向かって右の奏者はマイクに向かって歌を歌う主唱の役割。彼らの左右両脇から4人ずつ計8人のダンサーたちが登場してくる。目の周りを白く隈取して強調、二の腕、腕にも白く模様をつけている。頭には簡素な冠、孔雀の羽で飾られている。幅広めの布はX字に交差するストラップとなってスカート状の腰巻を吊っている。そのスカートにも無数の孔雀の羽が下向きにつけられていた。

向かって左から出てきた4人は何も手にしていないが、右側からのダンサーは左手に入る小型の太鼓、マラカスそして小さなほら貝を持って出てきた。左右両翼が向かい合って踊り始める。その内、1人が中央に歩み出て客に向かってソ口を踊ってゆく。顔の表情を強調する者、動物（猿）の真似を踊る者、肩を小刻みに震わせる者、首の柔軟性を見せる者、皆が皆中腰で蟹股で

(18) Mr.P.Joseph D.Rai : Assistant Documentation Officer. SANGEET NATAK AKADEMI

(19) Lok Utsav = Folk Festival

ある。メロンらしい果実を高く放り投げ頭で割る曲芸も3人が見せていた。集団舞踊の最後は、1人が鰐のように地面に伏して腕立て伏せのように、飛び上がる反復運動を続け、その上を残りの7人が連なって飛び越して行くというもの。要するに7人編成のムカデが、1人を、自らの股トンネルをくぐらせるわけである。2回繰り返してそのまま退場していった。

歌。主唱はマイクで歌われ、同じフレーズをその他全員が返すスタイルである。歌詞の内容は、調査を要するが以下のように聞き取れた。

ヤーレーソー ビラール
アッラーヤラー ビラーレソー マナー マナー
(これよりソロ踊り始まる)
エー アッラーヤラー エーアラーヤラー
エー ガンガー エー ガンガー
ガンガー ミセリー メボー
ガンガー ミセリー
ヤッアラハッ
バーバーゴール
エー メラー マジ ラーガー
マローマナ ヒングレー
エー ガラカティング シャンギラー
アラハッ
マース カランダル
ラーイラーハ(メロン割り、テンボ上がる)
オーヤーレー カリーマ

ぴったり10分間のパフォーマンスであった。この時間はパキスタンのレーヴァーと一致する。

調査のときは以下のことに留意したい。

各楽器の正確な名称

楽器に雌雄があるか(ナル、マード)

皮、止め紐、胴体、足部分の正確な名称

楽器の寸法

ムガルバーンはムカッダス(神聖なるもの)か否か

ムガルバーンを叩く前の演奏者の準備（水浴など）
ムガルバーンの胴体や足を見せないのは何故か
ムガルバーンとパーワー・ゴールの関係は？
ムガルバーンはどんな人がどのように作るのか？
マーマーと呼ばれる同種の楽器を知っているか？
インドではほかにどこにムガルバーンがあるのか？
歌の言語
歌の意味
パフォーマンスはいつ行うのか？

以上がビデオで初めて目にしたスィーディーの舞踏パフォーマンスの観察メモである。この作業は現地でパフォーマンスを実見する際に、叩き台として非常に役立った。何語で歌われているのかも分からない歌詞はカタカナで聞き取った。現地で機会があったらカタカナで唱えてRとLの区別をつけてもらえばよい。下手なスケッチで、ステージ衣装とメーキャップの箇所やデザインも写しとった。直接絵を見せながら対話した方がコミュニケーションは円滑になろう。残念ながら現在このメモを記したノートは、鞆とともに盗難にあって紛失した。フィールドワークの渦中においては、一刻も早く記録を共有化する必要性を強く感じる次第である。

3．グジャラートのスィーディー：「スィッディー」調査

3.1 ラタンブルとゴーリー・ピール

3.1-1 聖地への道

「宝石の町」を意味するラタンブルという地名は、インドやスリランカで他にも見られるけれど、今回訪問するラタンブルは瑪瑙がとれたことから命名された。グジャラート州中部を流れるナルマダー川に沿った丘陵地帯にある。地図から見ると、海岸線に平行に走る鉄道路線から内陸部へ直進するルートでは、バルチ Bharuch の町からのアクセスが最短距離である。ただ、デリーからの夜行列車が一足先に停車するヴァローダラー（パローダ）の町の方が、都市として情報入手の点から有利であるように思われた。

3月6日。結局、我々はヴァローダラーから州営路線バスに2時間ゆられて内陸部に進み、ナルマダー川を渡って小さな藩王国の都に入る道を選んだ。ゴーヒル・ラージプートの王族が君臨したラージピーブラー Rājipīlā である。旧王族が今も住む小さな宮殿ホテル「ラージワント・パレス」(図4)に



図4 ラージワント・パレス・ホテル

たナローゲージ鉄道がバルチ方面へ一直線に走る。

運転手はヒンドゥー教徒である。幹線道路から左折する門で、一度車を止めて「ここがラタンブルだ」と教えてくれる。まずはゴリー・ピールのダルガー（聖者廟）に参詣する。村からさらに1.2キロくらい先に進むと右手に小さな丘が見えてくる。野焼きをしているのか白い煙もあがっている。1台のバイクが追い越してゆく。乗っていたのは黒人であった。乾季なのであろう山肌は茶色く、葉が落ちた木も肌をさらしている。

ゆるやかにS字カーブを上りきると、広いスペースが現われた。駐車場にもなる広場で、参道の両脇には小さな小屋が参詣奉獻用のバラの花、ココナツ、線香、布などを売っている。みな、降りてきた見慣れぬ東アジア人の顔を



図5 奉納する花やココナツ、布を売る店と参道階段

部屋を取り、ラタンブルへの訪問方法をホテルマンに相談する。ハイヤーで40分くらいだから、夕方までに往復できることが分かり、早速手配してもらおう。バナナと砂糖キビの大規模な農園がどこまでも続く。並行して藩王国時代に敷設され

を怪訝そうな視線で捕らえている。1番手前の店で男に話しかけて、訪問目的を告げ花を買う。彼は先ほどのバイクに乗った男だった、バシールと名乗る。参道（図5）はゆるやかな階段を上りきった所にあり、ビデオを構えながらその地点

に差し掛かった。「アッサラーム・アレイクム！」と挨拶をしてみる。だが、みな注視するだけで、「ワレイクム・サラーム」の決まり文句を返してくれないのだ。こんなイスラーム聖者廟は初めてである。ついてきてくれたバシールが「サラームを返せ！」とどなる。それでも、今まで見られたことのない視線が突き刺さる。ブルカが欲しいくらいだ。

靴と靴下をぬいでパーワー・ゴールの墓所（図6）にお参りする。花を捧げ調査の成功を祈願する。丘の上にあるこの廟



図6 パーワー・ゴールの棺



図7 マーイー・ミースラー廟

は展望台のようで、外には広大な景色が広がっている。隣接してパーワー・ゴールの妹「エジプトから来た貴婦人」を意味するマーイー・ミースラー *Māi Misrā*⁽²⁰⁾の廟（図7）があり、弟ハバシ *Habash* の廟は少し離れた低い丘上にみえる。

ニューデリーで下調べしたメモを出して、バシールに歌詞の発音を正してもらう⁽²¹⁾。そして、彼が海外公演も行うスィーディー・ゴマ・グループのメ

(20) マックン女神はパーワー・ゴールから逃れて地中に隠れたが、彼女の長く編まれた頭髮が地上に突き出ていた。ムスリムとして女性に触ることができなかった彼は、このような女神を完全に調伏できずにいた。そこで、「女には女を」の論理で彼の妹が派遣されこの女神を地上から完全に追い払ったという。彼女はマーイー・ミースラーと呼ばれ、女性原理の力 *shakti* を与えてくれる女聖者として崇められている。

ンバーであることを知って驚くと同時に嬉しかった。私たちはウルドゥー語で話し続けた。ラタンブルの村へ行って、具体的な話をしようということになった。

彼のバイクに先導されて、ハイヤーは舗装されていない細い道を少し走って、鶏を追散らしながら村の小さな広場に着いた。すぐに仲間たちがやってきて、挨拶される。歓迎されているようだ。だが、インドでこれほど多くの黒人たちと接した経験がない私には、この時点において彼らの表情がうまく読めない。

3.1-2 打楽器三態

「リーダーはいまに帰ってくるから」と椅子に座らされて、清涼飲料水のもてなしを受けた。彼らは家の中から楽器を出して、デモンストレーションをしてくれた。ここでは、3種類の楽器を見ることができた。

ムスインドー *musindo* は樽形の両面太鼓である(図8)。山羊の皮を張っていて、胴体はスィムラ樹をくり貫いて作られる。胴体には装飾として溝が彫



図8 ムスインドー

ってあった。ナル *nar* (雄): 低音と マーダ *mādah* (雌): 高音の面との区別がある。奏法は手で叩き、撥は使わない。この場所において1日で作られるとのこと。サイズは直径33.5cm、胴の長さ 44.5cm である。

ダマーマ *damāma* は脇に挟んで片手で打つ小型の両面太鼓である(図9)。素材や雌雄面の区別はムスインドーに順ずる。サイズは直径17.5cm、胴の長さ 30cm である。ダンマール *dammāl* と呼ぶ場合もあるという。

マーイー・ミースラー *māi mīsrā* は、ココナツの殻に柄をつけた一對

②) ガンガー → カーンガー *qāngā*

ガンガー ミセリー → カーンガー ミースリー *qāngā misrī*

メラー マジ ラーガー → メーラー マヌ ラーガー *merā man rāgā*

ガラカティング シャンギラー → カラカタンク シャーンギラー *karakaṭaṅg shāṅgrā*

のマラカスである。パーワー・ゴールの妹と同じ名前である(図10)。ムガルマーンをパーワー・ゴール、男性原理の象徴とすれば、こちらは女性原理となる。両方とも「穢れ」を嫌い、演奏者や聴衆が性交等で穢れている場合は、その呪力によって処罰されるといわれている。

楽器をビデオや写真に記録させてもらい、広場に面した大木の奥にあるパーワー・ゴールが住んでいたという聖祠に参り、子供たちの写真を撮っているとリーダー、サッピール・カマル・スィッディー氏⁽²⁾が現われた。涼しげな顔の中にも眼光は鋭い。もう一度一から挨拶をし、訪問目的を告げる。可能ならば短い舞踏パフォーマンスを見てみたい。彼は、「明日はホーリー祭だから外に出ぬほうがよい。明後日の10時に来てくれ」と約束してくれた。「一緒に昼飯を食うかい？」と尋ねられたので快諾する。



図9 ダマーマ(ダンマル)



図10 マーイー・ミースラー

3.2 スィーディー・ゴマ

3.2-1 神秘舞踏ダンマルの身上

スィッディーたちの舞踏パフォーマンスをダンマル *dammāl* またはゴマ

⁽²⁾ Mr. Sabbir K. Sidi は、2年前になくなった知識人カマル・バードシャー Late. Kamar Badshah の長男である。

goma という。ダンマールとは、イスラーム神秘主義の恍惚舞踏を指して使われる。ゴマはスワヒリ語の「ンゴマ *ngoma*」が語源である。「太鼓、舞踏」を意味するンゴマは、太鼓を使った舞踏パフォーマンス全般をも表している。

ダンマールはそのパフォーマンス形態から2つに分類される。まず、踊りよりも歌に重点を置いたダンマール。そして、逆に踊りを前面におしだしたダンマールである。前者は、宗教色が濃く、神秘主義儀礼のズィクル(声明)やカッターリー(集団歌謡)を演ずる。着座して行うことからバイティー・ダンマール^㉓と称する。後者は、エンターテインメント的要素をも盛り込める形態である。パーワー・ゴールの命日祭に演じられるリファーイー教団の奇行、火渡り、集団合唱、個人やアンサンブルでのダンス、アクロバット、道化などが演じられる。立つて行うことからカリー・ダンマール^㉔と呼ばれる演目となる。

ホーリー祭が終わった3月8日、我々の眼前で演じられたのは、後者のカリー・ダンマールであった^㉓。

そもそも、現在ステージで行われるダンマールは、見せるためのものではなく自分たちが聖者の力を借りて、神と合一するための修行法の一手段であった。イスラーム教徒にとって聖なる夜となる毎木曜日の夜^㉕(日没によって金曜日が始まることから)に、それはパーワー・ゴール廟の境内で行われていた。毎木曜日と、「ウルス」と呼ばれる聖者の命日祭^㉖がダンマールの本来の舞台であったこの形態は、現在では変わってしまった。

つまり、1986年頃から、対外向けのダンマールを構成する動きがはじまり、徐々に定例的な木曜夜のダンマールは行われなくなっていったという^㉗。2004年度に限っていえば、数ある国内公演の他に4ヶ月間を海外公演のためラタンブルを離れて過ごす彼らにとって、毎木曜を聖者廟で踊ることは不可能となっている。なお、結成当時は総勢30名からなっていたラタンブルのパフォーマンス・グループも、現在は、2つに分かれて活動を行っている^㉘。

㉓ *Baithi* とは「座って(する)」を意味するウルドゥー語。

㉔ *Khari* とは「立ったまま(する)」を意味するウルドゥー語。

㉕ 本パフォーマンスの記録は、報告会用資料ビデオ「インドの美術と信仰」の2項目目に、全編収録されている(イメージ文化学科資料室所蔵)。

㉖ 「ジュメラート(ジュマ「金曜」がはじまる夜)」と、ウルドゥー語で呼ばれる木曜の夜は、各地の聖者廟や宗教施設で、一晩中祈願成就のための「おこもり」や宗教歌謡カッターリーを聴く会「メヘフィレ・サマー」が行われることが多い。

㉗ ヒジュラ暦ラジャブ月(第7月)10~12日。2004年度は8月26~28日であった。

㉘ この期間ではないが、9月16日の木曜日にパーワー・ゴール廟を訪問すると、通例どおりの参詣者は大勢いたが、ダンマールは行われていなかった。

㉙ *Sidi Goma Group* (Sabbir K.Sidi) と *Siddi Goma Party* (Munna Badshah) である

3. 2-2 ムガルマーンとマルンガー

ゴマが行われる場所は、ゴーリー・ピール廟の裏手にある広場である。スィディのシンボル太鼓ムガルマーンもとうとうその姿を現した。高さは1メートルもある。ただ、持ち運びに容易なドラム缶を胴体としている。それでも、アフリカ人が好みそうな藍色の絞り染めの布をまとして美しい(図11)。

Saleem [1988] によれば、パキスタンではムガルマーンは聖なる太鼓とされていて、それに関わる幾つかの特別のしきたり (*xās adab*) がある。ムガルマーンは、特別に安置する清浄な場所を設け、胴体を見せずカラフルな色布で覆う。演奏者も聴衆も沐浴して体を清めなければならない、演奏者は演奏前に性交をしてはならない。演奏時は中央に置き香を焚く、奏者は手で楽器に触れその手に接吻する、全員が楽器に対して一礼する等。以上のことを厳守しないとムガルマーンは鳴ってくれないばかりか、押し黙ってしまう。

ゴーリー・ピールでもムガルマーンは特別室に安置され、管理人の厳しい監視下に置かれていた。また、胴体を布で隠す点も共通している³⁰⁾。ただ、ツアー用の携帯ムガルマーンに関してこれらのルールがどこまで適用されるのかは、今回の調査では明らかにできなかった。

今回の会では、初めて目にする楽器も登場した。楽弓マルンガー *malungā* である(図12)。その形状は竹製の大きな弓である。演奏法は、立ったまま弓を持ち、矢ならぬ撥で弦を叩く。打点位置の弓部分に反響装置として中が空洞の瓢箪がついている。撥はマーイー・ミースラーと



図11 ムガルマーンとサッピール氏
(前列中央)

³⁰⁾ ケニア、タンザニア、オマーンの類似型太鼓(原型?)にムソンドー *msondo* がある。アフリカでは一般的であるからが特別に布で胴体を隠したりしない。オマーンでは、この点ムソンドーの胴体を布で隠して演奏している。Kaseeb-ur-rahman は、スィンドにおけるムガルマーンを「またの名をムスィンドー (The “Mugharman” or “Musindo” is like a cango drum)」と呼び、明るい色の布で包まれると記している [Kaseeb-ur-rahman 1976]。スィンドにおいて1976年当時にムスィンドーの名称が残っていたとすれば注目に値する。



図12 マルンガー

共に片手でもたれる。この珍しい楽器は、スィッディー共同体の内部でさえ存続が危ぶまれ、ワークショップを開いて製作術と演奏術を若者に伝えたという代物である。

3.2-3 カリー・ダンマール(ゴマ)

枯れ葉が掃き清められ、バオバブならぬパニヤン樹の下にステージ空間が作られた。上半身裸になって、筋肉質の体がさらされる。サッピールは水性絵の具の筆を湿らせると、白い絵の具で顔と、メンバーの二の腕や顔に模様を描いてゆく。これらのデザインは、伝統的なものではなく

く、自分たちで考えたという。これからこのグループの将来を担う少年たちも、衣装こそないものの顔ペイントと上半身裸の姿で加わっている。そして、村からついてきた少女たち、参詣のついでに見物に來た一般人が観客となった。

準備ができたようである。

向かって中央に孔雀の羽の冠をかぶり、ムガルマーンを叩くサッピール、その左右にマルンガー奏者が1人と、ムスィンドー奏者が3人立つ。彼らは楽器を伴って動き回ることではなく、この定位置で舞踏音楽を主導する役目を演じる。他のメンバーはダンサーとして左右に待機している。吊りスカートを着け、孔雀の羽を冠にし腰にもつける。みな裸足である。

ムガルマーンが鳴り、すぐにムスィンドーが絡んで、4拍と3拍の組み合わせでリズムを紡ぎだしてゆく。全員が踊りだすかと思ったら、3人のダンサーが摺り足にみえるゆっくりとしたペースで前方に歩み出てきた。中央の1人を挟んで左右の男たちは、下の参道の店で買ってきた赤いバラの花を両手一杯に掲げている。中央の男が、地面に跪くとその頭上からバラの花を散華する(図13)。ガネーシャ・プージャーやブーミ・プージャーなど、ヒンドゥー的儀礼の文脈を意識してしまう。一方で、イスラーム聖者を祭場に招き入れる入場儀曲「ペーシュ・カール *pēsh kār*」のイメージとも重なる。

地面に敷かれた小さなバラの絨毯を残して彼らが後方に戻ると、別の曲が

始まった。ダンサーが1列になって、イスラーム的な左回り（逆時計回転）で円を描くと、すぐに2つに分かれた。並行して向かい合う2列の間には、ソロやアンサンプルのダンスを演じるステージ空間ができた。これから、スィッディー・ゴマのカリー・ダンマールは本編に入る。

歌は、ハズラット・ピラールを歓呼する。「ソー・ピラーレー」の繰り返しからはじまった。1人が短いフレーズを投げかけると、残りが全員で歌い返す呼応形式が著しい。みなリズムに乗ってステップを踏みながら歌い、自分が中央に出てゆく番を待っている。

衣装を着けたレギュラー・メンバーからソロダンスが演じられる（図14）。舞踏の特徴は、アフリカン・ダンスの教科書にあるような「ポリセントリック（多中心性）」と「アイソレーション（孤立運動）」である。ポリセントリックとは、踊りの総体の中で、体

の様々な部分を独立して自由に動かすことである。彼らの持ち前の身体的柔軟性を強調する動きのなかで、具体的に、肩から後背部にかけての自律性を強調する細かい動きがここでも見られた。

インドの古典舞踊⁸¹⁾は論外だが、グジャラートの民俗舞踊との類似性は気にかかるところだ。ただし、国境を越えてパキスタンで見せてくれたスィー



図13 ペーシュ・カールでの散華



図14 ソロダンス



図15 ソロダンス

ディーたちの舞踏との共通点は、十分指摘できる内容にある。

自由な舞踏が魅力的である。エロティックな踊り、動物の真似を意識した踊り、道化的滑稽さを見せる踊り(図15)、どの場面からも目が離せぬ迫力と魔力が発信されている。特に子供たちのソロには息を呑んだ。形を意識しない自由な身体表現の中に、アフリカの舞踏遺伝子が迫り出てくるのだ。もちろん、大人たちの踊りを見て学んでいるから、純粋なアフリカの舞踏といえるものではないが、少なくともスィッディー共同体内でしか見られない舞踏であることに疑いの余地はない。

音楽は少し速いテンポに変わった。ここから、ゴマ最大の見せ場である「椰子の実割り」がはじまる。ビデオで見た時は、いくらなんでもあんな硬いココナツを、頭突きで割るのは不可能だと思い込んで「メロン割り」とメモに記した。しかし、天空高く放り投げたココナツの着地点に飛び込んで、頭で実を砕き散らせる場面が眼前で展開した。割れると同時に、中の液体が飛び散り、砕けた実は、踏むと危険だし食用になるので、すぐに子供たちが回収している。合計3人がこのパフォーマンスを行った。この場面に関しては、バーワー・ゴールが属したと伝承されるゆえにスィッディーたちが崇敬する、リファーイー教団に顕著な荒行³¹⁾の一部とも読み取れる。

音楽もさらに速度を上げ、最後は、ビデオでも見たワニの踊り。ワニ役で地面に伏している男を全員が跨いで飛び越して行く踊りである(図16)。グジ

31) 古典舞踊の中でも、ケーララ洲の舞踊劇カターカリー *Kathākālī* には、身体言語表現としてアイソレーションの技術が使われているといえる。

ャラートでは、トーテムとしてワニを祭る先住民部族が見られるけれど、こちらはむしろ東アフリカでも見られる「ワニ狩りに挑む男の踊り」と解釈したほうが良いかもしれない。ワニを左廻りに2回跳び越して全員が太鼓の左右に戻り、太鼓が揃ってダンダンダン！ととまった。



図16 ワニ狩りの踊り

これで終了であった。すぐに楽器を積み込み、衣装を着替え、メイクをふき取って村へ帰ってゆくメンバーたち。子供たちの学資基金にと薄謝が入った封筒をサッピールに渡すと「ありがとう」と言いながら、その場で封を破ることはしなかった。彼の家では、とびきりのチキンカレーとカリフラワーのカレーをチャパティーでご馳走になった。全体に穏やかで、裕福とはいえないが暖かくもてなしてくれるこの客人歓待の感触は、パキスタンではマクラーン地方でパローチ族たちが見せてくれたマナーと共通する、と感じた。

3.3 ラタンブルのスィッディー被研究史、今後の展望

食事をしながら、サッピールにスィッディー研究の経緯を尋ねた。

彼の話によると、1980年代初頭、最初にドイツからヘレネ・バス Helene Basu がやってきた。彼女は1年間サッピールの家に滞在して、パーワー・ゴール信仰とスィッディーについて研究した。サッピールの亡父カマル・バードシャー氏は、この村随一の知識人で、カッターリーの歌い手にしてスィッディーの歴史や信仰について最も詳しい人であったからだ。

1999年、民族音楽学者のエミー・キャトリン・ジェラズボーイが中心とな

⑧ リファアーイ教団のパフォーマンスは、1998年と1999年度のパローチスターン調査の際に、グワダールで記録した。「マーリド *mālid*」と呼ばれる儀礼で、預言者そして聖者の生誕を祝して行われる集団儀礼。自分の体にナイフやアイスピックを打ち込む動作をしたり、高温に熱せられた鎖に手で油を擦り付けて炎の火柱をあげる場面が観察された。

り、グジャラート州におけるスィーディー音楽調査を始めた。そして2000年2月、ラージピープラーの旧藩王マハーラージャ・ラグビール・スィングジーと王妃ルクマニー・デーヴィー^㉔が主宰者となり、自らの王宮ホテル(図4)を会場に『西暦2000年におけるスィーディー：歴史・文化・発展^㉕』なる国際シンポジウムが開かれた。国内外の研究者、そしてインド各地のスィーディーたちが出席して、様々な対話が行われ、問題点が討議された。

2004年、エミーの提言もありスィッディーたちは自分たちの社会生活向上のために、「ハズラット・ビラーリー・トラスト Hazrat Bilali Trust」という福祉団体 NPO を結成した。この団体は、貧しいラタンブル村の子供たちに高等教育を受けさせるための奨学金交付を目的としている。公演で得た報酬の中から、このトラストに基金として積み立てを行っている。何よりも教育こそが、今後のスィッディー共同体の生活と地位向上に必須であると考えからである、とサッビールはいう(図17)。

インドにおいてのスィーディー研究は、エミーたちの研究書『スィーディーと学者たち：アフリカ系インド人論集』^㉖の刊行をもってひとまず実を結んだといえるだろう。もちろん、言語学的調査や、民俗学的調査などまだ究明すべき余地は残されている。

実際にラタンブルの人々と接してみて、個人的には、彼らの中に芽生えつつある「アフリカ回帰志向」について興味を抱いた。ダンマールやカッター



図17 ラタンブル村の子どもたち

㉔ H.H.Raghubir Singhji Gohil & Rukmani Devi Gohil with Manvendra Singh Gohil.

㉕ Sidis at the Millennium : History, Culture and Development.

㉖ Catlin-Jairazbhoy, Amy & Edward A.Alpers

リーの歌詞中に、無意識にスワヒリ語と思われる単語が飛び出すことはインドでもパキスタンでも聞いていた。ところが、現在では自らスワヒリ語を学んでスワヒリ語の歌を作って演目に加えているグループも存在するのだ。もともとは、自分たちのルーツ探しの一手段として語学学習を始めたものであろう。しかし、わざわざアフリカ性を強調する背景には他のグループとの差別化を狙った商業的戦略が窺われる。スィッディーのパフォーマンスの売り物が、その「非インド性」「アフリカ性」にある以上、生き残るためにはいたしかたないかもしれない。この傾向の行方を見守って行きたい。

日本人としてこの村を訪ねてスィッディー文化を尋ねたのは、我々が初めてであった。何かできることはないかという問いに、「いつか日本にも呼んでくれたら嬉しい」と控えめに彼らは答えた。

重要性が叫ばれながら、パキスタンにおけるフィールドに基づいた研究と成果の公表が十分になされていないのは、わが身も含めてゆゆしき問題である。現地の研究者、スィッディーたちとの密接な交流の中から、更なる調査活動の必要性が求められる課題である。

また、この研究課題の性格上、もはや南アジア研究者だけの手には負えぬことは明らかだ。「楽器の伝播」というテーマに限定したとしても、ペルシア湾岸やオマーンの専門家、そして、東アフリカの専門家たちの力を借りながら共同で継続的に取り組むべきである、と考えたフィールドワークであった。

参考文献

- Abbas, Shemeem Burney 2002 *The Female Voice in Sufi Ritual: Devotional Practices of Pakistan and India*. University of Texas Press.
- Basu, Helene 1993 The Siddi and the Cult of Gori Pir in Gujarat. *Journal of Indian Anthropology* 28: pp.289-300.
- Burton, Richard F. 1851 *Sindh, and the Races that Inhabit the Valley of the Indus*. pp.253-257. Khan Publishers. Lahore. (reprint; 1976)
- Camara, Charles 2004 The Siddis of Uttara Kannada. *Sidis and Scholars: Essay on African Indians*. Rainbow Publishers, Noida (UP)
- Campbell, James M. 1899 Siddis. *Muslim and Parsi Castes and Tribes of Gujarat*. pp.11-12. Vintage Books. Gurgaon. (reprint; 1990)
- Catlin-Jairazbhoy, Amy & Edward A. Alpers 2004 *Sidis and Scholars: Essay on African Indians*. Rainbow Publishers, Noida (UP)
- Kenoyer, J. Mark & Kuldeep K. Bhan 2004 Siddis and the Agate Bead Industry of Western India *Sidis and Scholars: Essay on African Indians*. Rainbow Publishers, Noida (UP)
- Kaseeb-ur-rahman, S. 1976 *The Shidis of Sind; A Pilot Study*. Research Paper. Lok Virsa. Islamabad.
- Saleem, Agha 1988 *Sheedees Tribes*. Research Paper (in Urdu). Lok Virsa. Islamabad
- 富永智津子 2001 『ザンジバルの笛』 未来社
- 村山和之 2005 「2004年のチビ黒サンボ(1)」『インド通信』第315号、pp.1-2、インド文化交流センター

* *Sidis and Scholars: Essay on African Indians*. Rainbow Publishers, Noida (UP) 2004.

この文献は、在ニューデリーのデリー大学留学生、石川まゆみ氏のご協力なくしては迅速かつ、適正価格での入手は困難であった。この場を借りて深く感謝いたします。

* 図13～16（撮影：東聖子） 他は全て筆者撮影



サッピール・グループの CD
CD KAPAOIO. 2004 KAPA Productions. (EU)